



Title	栗田隆子さんへの感想文①
Author(s)	すえざわ, くりこ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 21-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86354
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集 1 第3回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけてられる声を聴く）
テーマ「書くことと、考えること、行動すること」

栗田隆子さんへの感想文①

すえざわ くりこ

2月10日、作家の栗田隆子さんのオンラインフォーラム「書くことと、考えること、行動すること」に参加した。修道院でのシスターとのやり取り、シモーヌ・ヴェイユや聖書の話、フェミニズム、キリスト教、労働運動など、栗田さんの個人的な体験からお話されたことはどれも面白く、ずっと前のめりで聞いていた。そしてお話の中の根底に流れていたもの、それは「呻き」だった。栗田さんは、以前あるインタビューで、「祈りは呻きを言語化する作業」とおっしゃっていたが、栗田さんのされる活動自体が、ご自身の内部にある呻きを封印せず、形にする作業になっているのではないだろうか。

私は小さい頃、絵を描くことが好きだった。誰から評価されなくとも、ただ書いている時間そのものが面白く、親に買ってもらった色鉛筆と画用紙で、時間を忘れて色んな絵を描いていた。

しかし、学年が上がるにつれ勉強が忙しくなってから、絵を描く時間が無くなってしまった。学校から帰ったら宿題をしたり塾に通ったりしなくてはならなくなった。水泳とピアノも習い始めた。いつの間にか、色鉛筆は机の奥にしまわれたまま、どこに行ったかもわからなくなった。

私にとって一人で黙々と絵を描いている時間は、「呻き」を言葉ではなく絵にしている時間だったのではないだろうか。習い事をして、勉強もして、人から褒められることは増えた。しかしその代償として、自分の中の形になっていないものを置いてきぼりにしていたのではないだろうか。

シモーヌ・ヴェイユは「不幸とは言葉が無いこと」という。彼女の書いた『工場日記』を読めば、過酷な工場生活で人々が奴隷化し、言葉を奪われている様子が分かる。この本は昔の工場での過酷な生活について書かれた本であるが、もしかしたら現代に生きる私自身にも当てはまるかもしれない。学校という集団に入っていくことによって、自分自身が持っていた言葉を奪われ鋳型にはめられる。そして私の内部にある呻きを形にすることを奪われていたのかもしれない。

フォーラム中、栗田さんがおっしゃったことで二つ印象に残ったことがある。「呻きが言葉にならないとき、体に働きかけて自己や他者への暴力へと向かっていくのではないか」、そして創世記を引用し「自分に裁きを下さない」というセリフだ。私は中学の時、不登校だった。当時、集団になじめない自分自身を裁いていた。10年前に

線維筋痛症という病を発病してからも、病気である自分、「普通」の人生を送れない自分をまた裁いていた。その裁きは、私の呻きに蓋をして、言葉にするのを許さなかった。しかし一年前から、私は「書くこと」をはじめた。すると自分自身の小さいころから発していなかった呻きが徐々に形になりはじめた。この年になってやっと小さい頃からの自分の呻きに向き合ひだし、自分との対話を始めている気がする。

シモーヌ・ヴェイユを読んでいて、クリスチャンで、書くことを趣味にしている、集団にいつもモヤモヤを抱えている私にとって、この度の栗田さんのお話はどれも面白く、フォーラムの2時間はあっという間に終わってしまった。また栗田さんがこのようなお話をされる機会があったら絶対参加しよう。最後になりましたが、貴重なお話を聞かせてくださった栗田隆子さん、ありがとうございました。

(すえざわ・くりこ)